

to不定詞の目的と結果

—主語の意図性の有無—*

関 田 誠

1. はじめに

to不定詞は、形式は「to + 動詞の原形」という1つであるが、意味的には名詞的・形容詞的・副詞的の3つの用法が可能で、日本の英語教育の現場では、そのように扱われている。その中でも副詞的用法は、さらに意味の範囲が広く、例を挙げると、目的、結果、判断の根拠など複数存在する。場合によっては、どの意味に該当するかを判断する基準は何であるのかという疑問が浮かび、教える側も教えられる側も基準が明確でないままになっているのではないだろうか。

例えば、以下に示す英文を与えられた場合、少なくとも「目的」と「結果」のどちらかで迷うはずである。また、一方の解釈になりもう一方が成立しない理由を説明することは難しいであろう。

(1) And Mr. Palmer went running upstairs to his piano to write it down.

(Robin Maugham, *Stolen Tune* [九頭見 1996: 53])

(2) He studied hard only to fail.

(稲田 2014: 145)

* 本稿は第27回日本英語英文学会大会シンポジウム（2018年3月3日、於：千葉工業大学 新習志野キャンパス）での発表内容をもとに加筆・修正を加えたものである。当日、発表内容に有益な質問、コメントをいただいた各氏に記して感謝申し上げます。また、内容に関して有用なアドバイスをいただいた匿名の査読委員2名、及び有益な情報を提供してくれたインフォーマントの2名にも謝意を表す。残る不備・遺漏は筆者の責任である。

実際、授業で大学生に日本語に訳させると、(1)では、to write it downを「それ(曲)を書くために」のように訳す。確かに、学校文法通りの「目的」用法であり、問題は無さそうである。しかし(2)では、学生は、only to failを「失敗しないことのためだけに(一生懸命勉強した)」という訳を与え、文意を変えて強制的に「目的」にしてしまっている。正しくは「一生懸命勉強したが、結局失敗に終わった」であり、「結果」用法である。

上記の2つの例から、次のような基準が考えられる¹⁾。

- (3)「A(=主節) to B(=不定詞)」とした場合、文脈から判断して、「BのためにAする」が通じれば「目的」用法で、「Aしてその結果(結果的に)Bする」がより適切な解釈の場合は「結果」用法になる。

しかしながら、もし(3)が真だとすると、少なくとも(1)は「目的」も「結果」の解釈も両方可能になってしまう。例えば、「2階に行って……それを書いた」と「結果」用法として解釈できる。この場合、「目的」と「結果」は何が異なるのか。また、(2)については、文脈判断から「結果」のほうがより適切になる。しかし、「失敗するためだけに」という「目的」の解釈が不適格になるという文脈以外の明確な判断基準は、(3)では示されていない。

学習用の文法書や参考書には、2つの用法についての説明は記載されているが、断片的な部分も多くあり、包括的な説明がされているとは言い難い。2つの用法を区別する明確で統一的な基準を提示できれば、英語に見られる言語現象の1つを説明できるだけでなく、英語教育の現場に生かすことが期待できる。

本稿では、学問的知見を教育に活かすという観点で、副詞的用法の中の「目的」用法と「結果」用法に焦点を当て、一般的な文法書を中心に両用法の説明を比較・分析し、「2つの用法のいずれかになるかは、A(=主節)とB(=不定詞)の主語の意図性の有無により決まる」という仮説を立て、判別を可能にする「目的・結果パラメータ」を提唱し、検証していく。検証する英文は、文法書の例文だけでなく実際に英語の授業で使用している英文も含める。また、最初に主節が来て、その後にと不定詞が来るという

語順に限定する。最後に、実際の教育現場での扱いについて検討する。

2. 「目的」用法

本節では、和書と洋書の両方の一般的な文法書の「目的」用法に関しての説明を取り上げ、その特徴をまとめる。

2.1. 和書による説明

教育現場でよく使われる参考書を中心に「目的」用法の説明をまとめたものが、次の(4)である。

(4) 和書による「目的」用法の説明

a. 「～するために」という目的

(綿貫・宮川ほか 2000: 477; 江川 1991: 319)

b. 主語がしようと思っていたことなら目的

(鈴木 2016: 201)

c. 主語の意図があれば目的

(綿貫・ピーターセン 2006: 134)

d. (i) 目的という概念は、何らかの行為をする際の動作主 (Agent) ある

いは、その行為者の意志 (Volition) の存在がなければ成り立たない

(ii) 主節の叙述動詞は、動作主動詞 (agentive verb) でなければならない

い (荒木・安井 1992: 1190)

e. 「目的」を表す不定詞は、述語動詞の示す時点ではまだ実現していない

事柄を表す (埴 2017: 190)

(4a) は、「目的」の意味を日本語に反映させたものである。(4b) と (4c) は to 不定詞、(4d) は主節に関しての意図性について触れており、特に動作主・行為者である主語の意志が「目的」用法には必要であると述べている。また (4d) は「意志の存在」を明示する方法として、(主節の) 動詞の種類が意図的にできるものにする必要があることに言及している。しかし、主節であれ to 不定詞であれ、主語の意図性の有無を動詞の意味的特性だけで判別するには限界がある。例えば、return (戻る) という動詞は、普通は意図的にする行為である。場合によっては、何らかの理由で主語の意志に反して「戻る」こともある。確かに、「戻る」動作そのものに関して言えば、両

方とも主語が意図的にすることである。しかしながら、主語の意志で「戻る」行為に至るのか、それとも他人の意志でそうなるのかでは、想起される文脈が異なってくるはずである。このことを考慮に入れると、意図性の有無は文脈を踏まえて判断する必要があるが出てくる。(4e)は、主節の動詞が表す時点では、to不定詞が表す動詞の行為はまだ実際に起きていないこと表している。これは、意図性と合わせて考えると、「目的」用法はあくまで主語が意図していることであり、その実現性までは述べていないことを示唆している。

2.2. 洋書による説明

和書による説明と大部分が重なる。以下 (5) に説明を列挙する²。

(5) 洋書による「目的」用法の説明

- a. “Purpose, ..., implies intention (though this is not always overtly expressed in the matrix clause)” (Huddleston and Pullum 2002: 733)
- b. “it [the result] is yet to be achieved – it is a desired or aimed-at result” (Quirk et al. 1985: 1108)
- c. “putative” (Ibid.)
- d. “... use an infinitive to talk about a person’s purpose – why she or he does something” (Swan 2016: 112)

(5a) と (5b) は、intention, desired, aimed-at のように意図性を表す表現が使用されている。(5a) では、さらに意図性が必ずしも明示されているとは限らないとある。これは前述したようにやはり文脈上で判断しなければならない場合があることを示唆している。(5b) においてはresultと日本語でいう「結果」の1つとして区別している。ここでは、「意図した結果」のことを言っている。(5b) と (5c) においては、to不定詞が表す内容の(非)実現性について触れており、まだ達成されていないことを述べている。(5d) は、(5a) と同じようにpurposeという語が使用され、日本語の「目的」を指す。また、(5d) のwhyという語から分かるように、「目的」用法は理由を表す用法にもなっている。

2.3. 「目的」用法の特徴

第2.1節と第2.2節をまとめると、「目的」用法には、以下の(6)に示す特徴があることが理解できる。

(6) 「目的」用法の特徴 (A = 主節・B = to不定詞)

- a. BするためにAする
- b. A・Bの主語の意図・意志→【有】
- c. A・Bの動詞→【「有」意志】
- d. Bは意図している事柄
- e. BはまだAの時点では実現していない
- f. 時間軸: A→B = AしてBする

(6) から、「目的」用法に関して重要なことが4つある。1つ目は、AとBの主語がする行為には意図が有る。2つ目は、意図性を含意する種類の動詞が選択される。3つ目は、意図的に何かをすることができるのは、通常意志を持って行動できるものに限られるため、「目的」用法で使用される主語には人が来る可能性が非常に高くなる。4つ目は、時間的に主節の事柄が先でto不定詞のそれが後に起こる。

本節では、「目的」用法の特性として、主語に意図が有る点が特に重要であることを確認した。この事実から、主語の意図が無くなると、「結果」用法になることが予測される。これを踏まえて、次節では「結果」用法について検討する。

3. 「結果」用法

本節では、前節と同様に一般書を中心に「結果」用法の特徴をまとめる。

3.1. 和書による説明

以下の(7)は、一般的な文法書の「結果」用法に関する説明を列挙したものである。

(7) 和書による「結果」用法の説明

- a. 思いがけない結果 (埴 2017: 190)
- b. (i) 主語がそういう結果を意図していたわけではなく、結果としてそうなった場合
(ii) 主語がしようと思っていたことではない (鈴木 2016: 203)
- c. 主語が考えていなかったことが起きたような場合は結果
(綿貫・ピーターセン 2006: 134)
- d. (予期・予測しなかった) 結果・結末 (デクラーク 1994: 644)
- e. (i) はじめからそうする意図はなく結果としてそうなったという意味を表すのがふつう
(ii) 不定詞の動詞が自分の意志ではできない場合は必ず結果
(中邑・山岡ほか 2017: 183-184)
- f. <目的>とは異なり、無意志述語が用いられる (安藤 2005: 212)

(7a-e) は、「目的」と反対に「結果」の場合は主語に意図は無いと述べている。これは、予想外や偶然性が含意されることを示唆しており、そのような説明がされている。(7e) の (ii) と (7f) においては、動詞の種類に言及しており、自分の意志では操作できない動作・状態を表す動詞が使用されることを指摘している。(7) の全てが、「結果」用法には主語の意図性は無いことを明示、または暗示している。

3.2. 洋書による説明

和書の意図性の有無の説明に加えて、洋書には語順や時間軸等、「結果」用法を理解するうえで重要な情報が記載されている。

(8) 洋書による「結果」用法の説明

- a. (i) “Result does not imply intentionality or agentivity” (p. 733)
(ii) “that [the infinitival] ... indicates a resultant or subsequent situation”
(p. 1265)
(iii) “Result adjuncts cannot be fronted: they occur in end position”
(p. 733)

(iv) “Result adjuncts are characteristically prosodically detached, with the status of supplements” (p. 733)

(Huddleston and Pullum 2002)

b. (i) “factual” (p. 1108)

(ii) “the result is achieved” (p. 1108)

(iii) “blend the meaning of time and outcome” (p. 1109)

(iv) “temporal function, expressing the outcome of the situation”

(p. 1079)

(Quirk et al. 1985)

c. (i) “a connective link” (p. 221)

(ii) “... confined to such verbs as find, hear, learn, see, be told etc. ...”

(p. 222)

(Thomson and Martinet 1986)

d. “... used to say what somebody found out or learnt at the end of a journey or task”

(Swan 2016: 114)

(8a) の (i) から、「結果」には intentionality (=意図) や agentivity が無いことが分かる。(8b) の (i) と (ii) では、「目的」の yet achieved と putative とは反対に、それぞれ「結果」用法は achieved と factual とある。これは、「結果」が表す出来事が実際に起きたことを意味する。(8a) の (ii)、(8b) の (iii) と (iv)、(8c) の (i) と (8d) では、to不定詞が表す事柄が、主節の後に続いて起こっていると述べている。(8a) の (iii) では、to不定詞は end position (=文末)、つまり主節の後ろに置かれ、文頭には来ないと説明している。また、(8a) の (iv) では prosodically detached とあり、主節と to不定詞が音声上区切られ両者が独立(区別)して読まれるとある。(8c) の (ii) では、to不定詞の動詞の種類を限定しており、挙げられている例から分かることは、意志がなくてもその行為が成立してしまうものが多い。例えば find は、対象(目的語に来る要素)が見つめようとしなくても見つけてしまう動詞の類である。Oxford Advanced Learner's Dictionary の「find」の最初の定義にある ‘to discover sb/sth unexpectedly or by chance’ の unexpectedly や by chance の意味から、find には意図性は無いことは明らかである。また、限定される動詞の種類の中に be told が含まれている。こ

れは受動態である。通常、受け身は「～される」というように「何かを被る」という意味になるため、主語の意図性が無くなると考えても不思議ではない。確かに、「～されるために」と意図的にできるが、非意図性を含意する受け身がto不定詞に使用されると「結果」用法になる可能性は十分にある³。

3.3. only to do と never to do

英語教育現場では、only to do と never to do は、次の (9) が示すように「結果」用法の中の別見出しで、熟語として扱われることが多い。文法書の大半はこの形式に従っている。

(9) only to do と never to do の説明

- a. A (,) only to B = 「Aしたが、Bしただけだった」 → 「望んでいたものとは異なる残念な結果」 (鈴木 2016: 203)
- b. “... can be used as a connective link without only, and without any idea of misfortune” (Thomson and Martinet 1986: 222)
- c. A (,) never to B = 「Aして、二度とBしなかった」 (鈴木 2016: 203)
- d. <never to ~> も only to も共に、結果を表す独立性の強い句である。そこで、この2つはその前にコンマを置くことが多い (綿貫・ピーターセン 2006: 134) (英語表記、日本語訳一部改)

(9a) と (9b) から分かるように、only to do と never to do には、それぞれ熟語として日本語訳が与えられている。(9a)、(9c) と (9d) では、コンマを置くことが随意的であると説明されている。特に (9d) では、to不定詞の独立性の強さも述べており、1文というよりは、2文あるかのように解釈する必要があることを示唆している。この点は (8) の「結果」用法の説明と一致している。また、(9b) は only が無くなることで misfortune (不運さ) の概念が無くなるとあり、(9a) ではこれを言い換えて、only があると「残念な結果」を表すと説明している。

要約するとコンマと only や never が付随するだけで、「結果」と区分されている。しかし、only や never が付随して「目的」の意味にはならないの

か疑問が残る。onlyに関しては、「目的」になる場合もあることは、すでに多くの参考書で記載されており文脈で判断するとしている。例えば次の(10)は「目的」を表すとしている。

(10) He works hard only to support his son.

(彼は息子を養うためだけに一生懸命働いている)

(鈴木 2016: 203)

neverに関しては、「結果」に限定されている。詳細は、第4節で述べる。

3.4. 「結果」用法の特徴

まとめると、以下(11)の特徴が確認できる。

(11) 「結果」用法の特徴 (A = 主節・B = to不定詞)

- a. Bの主語の意図・意志→【無】
- b. Bの動詞→【「無」意志】
- c. Bは意図していない事柄
- d. Bは実際に起きた
- e. Bは文末に置かれ、また独立性がある
- f. 時間軸: A→B = AしてBする

「目的」との類似点は、「AしてBする」という時間軸である。どちらも並べた順番に出来事が起こる。

一方、相違点は3つある。1つ目は、「目的」ではAとBの両方に意図が有るとしていたが、「結果」はBのto不定詞にしか触れておらず、Bに意図が無いと「結果」になる。2つ目は、Bは実際に起きた出来事を表す。3つ目は、AとBの間にコンマを置くなど、Bの独立性が強いことである。

次節では、主節とto不定詞が表す行為の主語の意図性を考慮に入れて、「目的」と「結果」を判断する基準を提示する。

4. 「目的」用法と「結果」用法

本節では、第2節と第3節を元に「目的」と「結果」を判別する基準を公式化したものを提示し、その妥当性や有効性を例文を分析しながら検証する。

4.1. 判断基準

主節とto不定詞の主語の意図性の有無を基準に、2つの用法の関係を整理し図式化すると、以下の(12)に示すように、論理的に4つの公式が成り立つ。

(12) 目的・結果パラメータ (Purpose / Result Parameter: PRP)

- a. A [+] & B [+] = 「目的」
- b. A [+] & B [-] = 「結果」
- c. A [-] & B [+] = 「解釈不能」
- d. A [-] & B [-] = 「結果」

(A = 主節・B = to不定詞; 主語の意図性: 有 = [+]・無 = [-])

まず、前提として「目的」・「結果」用法の両方とも、「AしてBする」という時間軸を表す。AとBには時間のずれがあるため、それに伴い理由や因果関係を表すことができる。例えば、BがAの理由となることもあれば、Aして、結果Bが生じるという解釈にもなりうる。

次に、目的・結果パラメータ (=PRP) について詳しく説明する。「目的」を表す場合は、AとBの両方に主語の意図性が必要であるため、(12a)のみが「目的」用法となる。「結果」は、Aについての主語の意図の有無に関わらず、Bの意図性が無いことが条件であるため、(12b)と(12d)は「結果」を表す。また、(12d)はAの意図性が無いことから、必然的に「結果」の解釈になる。「目的」にはAもBも[+]、「結果」にはB[-]が必要であることから、(12c)は、まれに目的を表す場合があるが、少なくとも理論上は解釈不能となる⁴。

意図性の有無は、節全体と文脈を考慮に入れて判断する。しかし、判断が形式的ではないため、意図性の解釈に揺れが生じる可能性は十分にある。

つまり、AとBどちらも意図性が有るとも無いとも、どちらにも解釈できる可能性が出てくる。そうすると、(12)に示す4つ全てが可能となり、「目的」と「結果」両方の解釈が可能になる。

さらに、意図性が無いということは、その出来事を予想・想定してはいないことになる。予想外・想定外の出来事には、良い悪いの両方が考えられるため、「結果」は必ずしも「悪い結果」になるとは限らない可能性がある。

まとめると、AとBの意図性の有無を判断してPRPに入力すれば、「目的」・「結果」のどちらかの値が出力され判断が可能になる。

4.2. 検証

例文を挙げてPRPの妥当性を検証していく。まず、一般的な例文から見ていく。主節のAに相当する部分とto不定詞のBに相当する部分は、両者を明確にするために区切り線を入れて表記している。

(13) 一般的な例文

- | | | |
|-----------------------|---|----------------------------------|
| a. A [+] | B [+] | |
| I went to the library | to prepare for the test. | (埴 2017: 190) |
| b. A [+] | B [+] | |
| I sat down | to rest. | (中邑・山岡ほか 2017: 184) |
| c. A [+] | B [+] | |
| She got up early | to catch the first train. | (Ibid.: 182) |
| d. A [+] | B [-] | |
| I came home | to find my bike had been stolen. | (鈴木 2016: 202) |
| e. A [+] | B [-] | |
| He returned home | to learn that his daughter had just become engaged. | (Thomson and Martinet 1986: 222) |

く」ことは、主語が意図している事柄と考えにくい。(13g) は、AとBの主語がThe curtainsと無生物であるため、AとBが表す内容が意図的であると考えにくいゆえA [-]・B [-] になり、「結果」用法となる⁵。また、(13d) と (13f) は予想外の悪い結果で、(13e) と (13g) は良い結果と解釈できる。

次に、文脈による意図性の判断が特に求められる例を挙げる。まず、以下の例はBに意図性が有るように一見思えるが、文脈上意図していないことと解釈できるため「結果」となる。

(14) 文脈により「結果」となる例

a. A [+]	Wilson raced down the pitch,	B [-]	to score in the final minute.
			(Whelpton 2001: 332)

b. A [+]	John worked on the research project all summer,	B [-]	to complete it within days of the deadline.
			(Ibid.)

(14a) は、「サッカー」という文脈を想定した場合、scoreすることに意図性は有ると考えられるが、in the final minute (最後の一分) でscoreすることは意図していない。想定外の出来事であるため「結果」となる。

(14b) も、completeする意図はあるがwithin days of the deadline (締切りから数日経って) でcompleteすることは意図していない。これは「夏の間ずっとプロジェクトに取り組んでいた」ということから、期限内に終わらせるつもりだったはずである。よって「結果」となる。

文脈判断を特に必要とするもう1つの例として、Bにonlyを伴う英文がある。先にも述べたが、only to doは「結果」を表す熟語として扱われるのが一般的だが、「目的」になる場合もある。PRPに従い、特に意図性に注目すればonlyの有無に関わらず判断が可能になる。

(15) only to do の例

- | | |
|------------------------------|-------------------------|
| a. A [+] | B [+] |
| He bought an expensive car | only to please her. |
| | (埴 2017: 191) |
| b. A [+] | B [-] |
| Jack bought an expensive car | only to annoy his wife. |
| | (作例: 筆者) |
| c. A [+] | B [-] |
| I hurried to the station, | only to miss the train. |
| | (綿貫・宮川ほか 2000: 478) |
| d. A [+] | B [-] |
| (=2) He studied hard | only to fail. |
| | (稲田 2014: 145) |

(15a) と (15b) の違いは、B の動詞がそれぞれ *please* と *annoy* になっていることである。購入しているものが一般車ではなく高級車であるという A の内容から、高価なものを買うにはそれなりの理由があると推測できる。A は [+] となる。(15a) の *please* は「喜ばせる」とあり、高価なもので喜ばせることは十分考えられるため、「目的」と解釈できる⁶。

(15b) は (15a) の場合と同様に、高級車を買う理由があると推測され、A の主語が意図的に買ったことは容易に理解できる。しかし、想定される文脈が大きく異なる。この場合、ごく一般家庭の夫婦で家計を共にしていると考え、高級車は贅沢品で日常の必需品ではない。「妻を苛つかせる」ことは「高級車を買った」行為が招いた「結果」として解釈することは十分可能であり、妥当な解釈である。John は、購入時はいいと思って買っているはずで「苛つかせる」意図はなかった (= B [-]) と考えられる⁷。

(15c) は、A の *hurried* も B の *miss* も動詞それ自体からは意図的であると考えられるが、「急いだ」からには「間に合う」つもりだったはずで、「電車を逃す」つもりではなかったと考えられるため「結果」用法となる。

また、最初に提示した (15d (=2)) の例文も「結果」になる理由が説明できる。*fail* (失敗する) は、もちろん意図的に失敗することはあるが、普通は意図的の行為とは捉えないと考えられる。特に、主節の「一生懸命勉強し

た」があり、一般的に勉強の目的は成功（例えば、試験合格）であるため、文脈上 fail は意図していないと判断した方が自然の解釈になる。よってこれも「結果」となる。

上記の説明は、only を考慮に入れず意図性の有無だけでどちらの用法になるかを判断している。よって、only は意味の付加の役割を担っているに過ぎない。only は「目的」ならば「～するためだけに」となり、「結果」であれば「残念な気持ちを付け加えて、結局～するだけだった」となる。

最後に、どちらの用法になるか曖昧な例を挙げる。具体的にはBがnever to doの文である。次の(16)の例では、参考書や辞書では全て「結果」用法であるが、インフォーマントに調査を行うと全て両方の解釈が可能であることが分かった⁸。さらに、解釈には優先順位があり、(16a)は「結果」、(16b)と(16c)は「目的」、そして(16d)は「結果」が優先されることも明らかになった。

(16) 曖昧なる例：never to do

- | | |
|--|--|
| a. A [-] > [+]
He disappeared from town, | B [+] · [-]
never to return again.
(小西・南出 2001 「to」) |
| b. A [+] > [-]
He left, | B [+] · [-]
never to return.
(Quirk et al. 1985: 1079) |
| c. A [+] > [-]
He left town, | B [+] · [-]
never to return again.
(作例：インフォーマントB) |
| d. A [+] > [-]
In 1674, the prince left his homeland, | B [+] · [-]
never to return.
(鈴木 2016: 203) |

(「x > y」 = y より x が優先解釈; 「x · y」 = x も y どちらも解釈可)

何故両方の解釈が可能で、さらに優先解釈まであるについては、やはりAとBの意図性が関係してくる。(16)のどの例もPRPの4つ全てに当てはまる。これにより解釈が両方可能になる。Aに相当する(16a)のdisappeared

from town、(16b) の left と (16c) の left town は、「自ら消えた」と意図的にも「何らかの事情で消えた」と非意図的にも解釈できる。さらに、B に相当する never to return (again) も同様に「(二度と) 戻ってこない」という行為は意図的にもでき、また何らかの事情で戻りたくても戻れない非意図的な場合もある。

では優先順位はどう説明できるか。(16a) では、A の意図性が A [-] > [+], つまり「無」が優先される。これは disappear という単語の特徴で、主語が自ら意図的に「消える」行為ではなく「そのつもりはないが消える」という意味の方が強いためである。PRP により、A [-] は B [-] になるため、「結果」が優先される。

(16b) と (16c) は、A の left という単語が disappear と反対に、「自ら消える」という意味の方が強く、A [+] が優先される¹⁰。「目的」が優先解釈だとすると、B の never (to) return も「自ら戻らない」の方が選択されていることになる。結果として A [+] と B [+] になり、「目的」が優先される。

しかし、(16d) は A が left にも関わらず「結果」が優先される。これには、文意・文脈が大きな影響を与えている。離れるのが homeland (故郷) であるため、この時点で「いつかは戻ってくる」という文脈が想定される。このことから、never to return (戻って来ない) は、「(戻りたいけど) 思わぬ事情があって戻って来れない」と解釈される。よって「結果」が優先される。もちろん「戻って来ないつもりで (故郷を離れた)」という「目的」の解釈も可能である。

興味深いのは A の意図性の有無の判断の時点で、「目的」か「結果」の見当がおおよそついているように見受けられる点である。例えば A [+] となっている場合は、B は [+] と判断できる動詞句・文脈だということを期待している可能性がある。この場合は「目的」優先で、B が [-] と解釈した時点で「結果」という判断を下す。(16b) と (16c) では、A の left が [+] と判断できるため、この時点で B に来るのも [+] であろうと予測し、[+] である return が来るので「目的」と判断する。しかし、(16d) は意図性に加えて left his homeland 自体の文意に関する文脈が想起され、これが解釈に作用し return を [-] と判断し「結果」となる。

今度は反対に、A [-] の場合は PRP により選択肢が B [-] しかないため、A の時点で「目的」の可能性は消え「結果」という判断をする。(16a)

は、Aのdisappearが[-]優先であるため、Bは[-]であると予測せざるを得ず「結果」と判断する。

さらに注目すべきことは、コンマが意外にも判断基準に影響を及ぼしていないことである。「結果」はコンマが置かれることが多いと言われているが、(16)が示すようにコンマ「有」でも「目的」と判断されている。

5. 教育現場での扱い

本節では、PRPを踏まえてどのように教育現場で「目的」・「結果」用法を扱っていくかを検討する。

まず、現場ではできる限り簡潔な説明が求められると考えられるため、極力単純化した方がよいはずである。PRPの公式を提示したように覚えさせるとなると、付加情報により余計な混乱を招く可能性は十分にある。しかし、言語事実を無視した、またそこから離れすぎた方法論になってはならない。何故なら、外国語習得するうえで、母語話者の言語知識を忠実に記述したモデルを構築していくことが望ましいと考えられるからである。母語話者回路に沿った、または極力近い教授法が理想である。

PRPが「目的」か「結果」を帰結として導き出す英語母語話者回路の1つだと仮定し、また教育現場で教えることも考慮に入れて、次の手順を提案する。最初に、よく使われる方法だがto不定詞の前で1度スラッシュを入れて切る。当然ながら、主節とto不定詞の2つの要素に分かれる。次に、PRPの根幹である「主語の意図性の有無」について順に考える。それから、主節の意図性によりto不定詞の意図がどちらになるか形式的に予測可能となること、また意味に関しても主節に意図があるかどうかを判断すると、それに伴う文脈・場面が想起されるためto不定詞の意図性の判断がし易くなることを説明する。最後に、特にto不定詞の主語が意図していないような予想外・想定外の事柄かを判断し、「目的」・「結果」を判別する。

PRPの有用性のさらなる検証も兼ねて、参考書の英文ではなく実際に授業で読んだ小説で使用されている英文を使用して説明する¹¹⁾。

(17) And Mr. Palmer went running upstairs to his piano / to write it down.

(=1)

(Robin Maugham, *Stolen Tune* [九頭見 1996: 53])

(18) ... and she ventured from her sister's / to stand pale and nervous in our path.

(Bernard MacLaverty, *A Rat and Some Renovations* [Ibid.: 3])

(‘/’は筆者による)

まず、(17)のitは「曲」を指す。主節にあるwent running upstairs to his piano (走って2階のピアノのもとへ行った)の特に「走った」から、主語のMr. Palmerが意図的にそうしたと捉える。また「意図的に行くからには何かをするためではないか」と推測する。この時点でPRPのA [+]・B [+]の予測がつく。そして、to不定詞のto write it down (曲を書く)とあり、ピアノで曲を書く(作曲)のは普通の行為であり、想定内の出来事と考えられるため意図的と判断する。よって「目的」とみなす。

(18)に関して、まず、この文に至るまでの背景を説明する。sheが大嫌いなネズミが外にいて、sheは姉妹の家の中で避難している。しかし、ネズミが外でsheの興味をそそるような面白可笑しい事態を引き起こしている。そのような怖いもの見たさの状況で、(18)にあるように好奇心から、sheはventured from her sister's (姉妹のもとから危険を承知で出てきた)という行動をとった。

分析すると、「危険を承知」ということから、この主節の行為にsheの意図性は有ると捉えられる。この勇気ある行動から、PRPはA [+]・B [+]と予測する。しかし、Bのto stand pale and nervousは、Aの行動から判断して意図した状況とは考えにくい。sheがBの「青ざめて不安そうに立つ」ことを意図してAをしたと解釈するのは難しい。よって、PRPはA [+]・B [-]となり「結果」となる。類例を挙げると(2)で、(18)はこの例文と同じような解釈過程になる。

文意・文脈を踏まえて1つ1つ追っているため説明が長いようにみえる。しかし、英語読解に必要ないくつかの能力を伸ばすことに役立つ可能性がある。例えば、文意・文脈を踏まえて内容から次の展開を予測する力や、英語の語順通りに左から右へ読んで理解する力を養うことが期待できる。ここでは、主節にある主語の意図を把握し導き出される次の展開を予測することで、その力を伸ばす練習になる。また、PRPが示すように「A [-]であれば、自動的(機械的に)にB [-]なり、「結果」になる」という英

語（言語）において重要な数学的・論理的な側面も教えることが可能である。

曖昧な *only to do* と *never to do* はどのように扱うべきか。PRPに基づく説明は、残念ながら混乱を招くことが予想される。まずは、従来通り「結果」を表現する熟語表現として教え、レベルに合わせて可能ならPRPを交えて曖昧性を説明すればいいのではないだろうか。教科書の範囲においては曖昧な文はおそらくないであろうから、最初から「目的」用法も可能であると説明するのは望ましくないであろう。

6. おわりに

本稿では、一般的な文法書の説明を精査しそこから「目的」と「結果」を区別するための方法として、「目的・結果パラメータ (PRP)」を提唱した。そして、参考書だけでなく実際の授業で扱った小説の英文も使用して、PRPの妥当性・有用性を検証した。結果、今回扱った英文に関しては全て説明が可能であった。また、教育現場でも文意・文脈を把握すれば、意図性の有無の判断は十分に可能と考えられるため、後はPRPが導き出す値に従い判別すれば問題ないはずである。

今回は、文法書や実際に授業で扱った英文に限られているため、さらなる調査は必須である。特に教育に生かすのであれば、中学・高校の教科書にあるto不定詞に注目して、PRPで全て説明ができるかを検証する必要がある。

注

1. 別の検証方法に、*in order to* を挿入できれば「目的」というものが提案されている（佐藤・田中 2009: 77）。Whelpton (2002) でも同様の方法をとっている。しかし、この方法は英語母語話者であればいわゆる直観を使用して適格性を判断することができるが、そうでない話者にとってはほぼ不可能に近いのが現状であろう。後者でも判断できる基準を提案することが本稿の主たる目的である。
2. 「目的」・「結果」に関する説明はHuddleston and Pullum (2002) も Quirk et al. (1985) も *so that* 構文を主に例として挙げ、解説されている。両者ともに「目的」の節にはto不定詞の「目的」用法が記載されている。

「結果」に関しては、Quirk et al. (1985) は Note [a] (p.1109) で「結果」の to 不定詞は 15.25 節 (p. 1079) を参照するよう説明があり、その節では「結果」の so that と意味においては類似しているとある。

Huddleston and Pullum (2002) から引用した箇所の中略部分は“..., we have seen, ...” (p. 733) となっている。この we have seen は同書の 12.2 節 Purpose (pp. 727-731) を指しており、この節には to 不定詞の「目的」が挙げられている (p. 728)。よって、引用元の 12.4 節 Result (pp. 732-734) は so that 構文の「結果」が主に扱われているが、to 不定詞の「結果」もこれに含まれていると考えられる。また、to 不定詞の「結果」の例が挙げられている箇所には本文でも引用している“that [the infinitival] ... indicates a resultant or subsequent situation” (p. 1265) という解説があり、説明の一貫性を考慮に入れると resultant という表現が Result の節にある内容を含んでいないとは考えにくい。

また、2つの参考書の説明を元に提案した PRP (第4節参照) が to 不定詞の「目的」・「結果」の違いを明らかにしているため、上記の参考書にある to 不定詞の2つの用法の説明は妥当なものであると言える。

なお、上記の説明は本稿の第3.2節にも該当する。

3. to 不定詞に受け身を使用している文の例が次である。

One day Mr. Nelson disappeared from town, never to be seen again.

(ある日ネルソン氏は町から姿を消して、そのまま行方がわからなくなった)

(江川 1991: 320)

これは never to do の例で挙げられているため一見熟語とみてしまうが、be seen が受け身のことから非意図的であると判断することもできる。to 不定詞に意図性が無いため「結果」となる。

しかしながら、インフォーマント A・B (注8参照) は「目的」という解釈も可能だと言っている。受け身だからと言って非意図的では必ずしもないということを示唆している。また、意図性を判断するためには文脈も重要であることも意味している。never to do の詳細は第4節を参照されたい。

4. A と B の主語が同じであることと、A と B には時間・因果関係が含意されていることを踏まえると、A のことを意図しないで B のことを意図的にするという状況が考えにくいため解釈不能となる可能性がある。以下の例文で説明する。なお、I'll の will があることから次の例は意図的であると読めてしまうためここでは will は無視し、2つの命題である「書店に行く」と「数学の問題集を買う (ために)」に絞り述べる。

I'll go to the bookstore to buy a math exercise book.

(「書店に行く」「数学の問題集を買うために」)

(鈴木 2016: 201)

Aに相当する「書店に行く」ということを意図しないで行き、Bに相当する「数学の問題集を買う」ということを意図して行うことになる。確かに、行く気も無かったが偶然本屋に立ち寄り数学の問題集を買うことはある。しかし、この場合本屋に立ち寄る直前には買う気はなかったはずで、意図していない行為となる。もし偶然本屋を目にして「そうだ数学の問題集が必要だった」と思い本屋に立ち寄ったとしたら、「立ち寄り」行為は意図的な行為となる。

しかしながら、Bに主語の意図が無いと「結果」となるため、Bに意図がある(12c)は「目的」となる可能性はある。これは、Bの出来事を意図している要素が文脈に存在している場合に可能なことがある。これに相当すると考えられる例文を以下に挙げる。

(i) The window has a big sale sign in it (in order) to attract customers.

(Whelpton 2002: 192)

(ii) The battleship is near the coast (in order) to shell the harbor.

(Ibid.: 195)

(iii) The ship was sunk to collect the insurance.

(Ibid.: 199)

上記の主節の主語は全て人ではなくモノであり、一般的に意図性は無しと判断される。Whelpton (2002) では、(i) は in order を入れても問題が無い「目的」と判断されている。ここでは、attract customers の意図を有している要素は The window 自身ではなく、“Discourse agent” (文脈上の動作主) としている。PRP の点から分析すると、The window は意図性を保持できないため主節は [-] となり、attract customers の to 不定詞は [+] になる。これは (12c) の A [-]・B [+] に合致する。また、(ii) も同様に to shell the harbor を意図しているものは Discourse agent である。(iii) の主節は受動態のため、動作主の存在は暗示されている。to collect the insurance も ship 自身が「集める」行動をすることはできないため、Discourse agent の意図が存在していることになる。

よって厳密に言えば (12c) の値になり、残りの3つのどれにも当てはまらない場合は、さらに2つの選択肢を考えなければならないのかもしれない。1つ目の選択肢は「解釈不能」で、2つ目は Discourse Agent である。

今後は、ここで挙げた例文が中学・高校の教科書や小説・新聞等でどれぐらい使用されているか、また、どのような文脈で使用されているかを調査する必要がある。

5. しかしながら、インフォーマント A (注 8 参照) によると、カーテンを擬人化すれば「目的」用法としても解釈可能である。また、小川 (1954) でも次の例文の主語は *The curtain* であるが、作者の *Barrie* は「目的」用法のつもりで書いているはずだと述べている。例文の斜体、および日本語訳は引用元のままである。

The curtain falls here for a moment only, to indicate the passing of a number of years. – J. M. Barrie, *The Will*

(「時の経ったことを、‘示すために’幕が下りる」)

(小川 1954: 42)

6. インフォーマント B (注 8 参照) は感情の度合いで「結果」になる可能性もあると言っている。例えば、高級車を買った理由が「彼女を *impress* や *shock* するため」だったが、結局は「彼女をただ *please* しただけだった」という「意図してない結果」を表現できる。しかし、かなり限定的な文脈設定になるため、英語教育上混乱を避けるため「目的」として教えた方が良さそうではある。
7. インフォーマント B (注 8 参照) は「目的」としても解釈可能であると答えている。しかし、これも注 6 と同様に一般論に合わせて教育を考慮に入れると、「結果」として判断すべきであろう。
8. インフォーマント 2 名に調査を行った。一人はアメリカ人で男性 (= インフォーマント A)、もう一人はオーストラリア人で男性 (= インフォーマント B) である。
9. 大西・マクベイ (2011) では *never to do* の例文として以下の文脈を付けたものを載せている。日本語訳も引用元のままである。

Her husband disappeared. One day he was here and the next he was gone, never to be seen again.

(彼女の夫は失踪したのだ。ある日彼はここにいたのだが次の日どこかに行ってしまい、二度と目撃されることはなかったのだった)

(大西・マクベイ 2011: 466)

おそらく文脈をつけることで学習者に対してどのような場面でこの熟語が使われるかを示していると考えられ、「結果」の解釈が与えられている。しか

し、インフォーマントA・Bによると「目的」と解釈もできるという。never to be seen againと受動態が使われ（注3参照）、さらに文脈までであるのにも関わらずPRPのB[+]と解釈することも可能だということである。インフォーマントAによると、文脈から夫は積極的にいなくなったと解釈できるため、「目的」の解釈は「二度と目撃されないために」、が可能だという。

10. インフォーマントA・Bからの情報である。彼らによれば、優先度の違いは、動詞が表す行為が主語の意図的行為とはとらえ難いdisappearと、意図的行為としてとらえ易いleaveの両者の動詞の意味的性質によるという。また、disappearは主語の「非意図的事象」を表す非対格自動詞に分類される（高見・久野 2002: 13）。この事実からも、disappearは主語の非意図的行為を表す動詞であると考えられる。しかし、主語の意図性を、非対格自動詞なら非意図的で、その反対の「意図的事象」を表す非能格自動詞なら意図的と、2つの動詞区分だけで判断することは避けたほうがよさそうである。(13f)のwoke upは生理的現象と考えられ非意図的だが、生理現象を表す動詞は非能格自動詞に分類される（高見・久野 2002: 12）。主語の意図性と動詞の関係性については、さらに別の分類方法が必要なかもしれない。非対格・非能格自動詞の詳細については高見・久野（2002）を参照されたい。
11. PRPの存在が判明したのは、もちろん授業後であるため、実際の授業では本稿に載せている説明はしてはいない。今後、当例文を含め他の類例を用いて、提案しているようなPRPに基づいた説明の有効性を授業において検証していくつもりである。

参考文献

- 安藤貞雄（2005）『現代英文法講義』東京：開拓社。
- 荒木一雄・安井稔編（1992）『現代英文法辞典』東京：三省堂。
- デクラーク、レナート（1994）『現代英文法総論—A Comprehensive Descriptive Grammar of English—』安井稔訳 東京：開拓社。
- 江川泰一郎（1991）『英文法解説』改訂三版 東京：金子書房。
- Honby, A. S. (2005) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 7th ed. Oxford: Oxford University Press 電子辞書版: CASIO Ex-word.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 稲田一（2014）『中学・高校6年間の英語をこの一冊でざっと復習する』東京：KADOKAWA.
- 小西友七・南出康世編（2001）「to」『ジーニアス英和大辞典』東京：大修館書店 電子辞書版: CASIO Ex-word.

- 九頭見一志 (1996) 『現代随筆・短編小説選—味読・理解・演習』 東京: 朝日出版社.
- 中邑光男・山岡憲司・柏野健次編 (2017) 『ジーニアス総合英語』 東京: 大修館書店.
- 小川三郎 (1954) 『不定詞』 (英文法シリーズ 第16巻) 東京: 研究社.
- 塙タカユキ編著 (2017) 『総合英語 Evergreen—Keep the Forest Evergreen』 東京: いいずな書店.
- 大西泰人・ポールマクベイ (2011) 『一億人の英文法』 東京: 東進ブックス.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *The Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 佐藤芳明・田中茂範 (2009) 『レキシカルグラマーへの招待』 東京: 開拓社.
- 鈴木希明編著 (2016) 『総合英語 be – Voyage to English Grammar』 3rd ed. 東京: いいずな書店.
- Swan, Michael (2016), *Practical English Usage*. 4th ed. Oxford: Oxford University Press.
- 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』 東京: 研究社.
- Thomson, A.J and A.V. Martinet (1986) *A Practical English Grammar*. 4th ed. Oxford: Oxford University Press.
- 綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘 (2000) 『ロイヤル英文法』 改訂新版 東京: 旺文社.
- 綿貫陽・マークピーターセン (2006) 『表現のための実践ロイヤル英文法』 東京: 旺文社.
- Whelpton, Matthew (2001) “Elucidation of a Telic Infinitive.” *Journal of Linguistics* 37: 313-337.
- Whelpton, Matthew (2002) “Locality and Control with Infinitives of Result” *Natural Language Semantics* 10: 167-210.

(東海大学非常勤講師)
no619_makoto@yahoo.co.jp